

奥村五百子に学ぶ

学校長 下村昌弘

全校の皆さん、おはようございます。

今日は本校の開校記念日です。そこで、開校にちなんだ話をしながら、皆さんに考えてほしいことをお伝えします。

上級生の皆さんはすでに知っているかと思いますが、本校は明治40年（1907年）唐津女学校として創立し、大正9年（1920年）に唐津高等女学校となり、女子教育の拠点として大正から昭和の激動の時代を乗り切ってきました。

その後、戦後の教育改革により、昭和24年（1949年）に唐津高等学校となり、昭和31年（1956年）に唐津東高校と分離し、唐津西高等学校として独立しました。

唐津西高等学校となってからは、普通科のほか、家政科、定時制、通信制の設置、分校（商業科）の設置、平成に入ってから普通科英語コースの設置、県内4校のみで実施されていた前期入試の導入、文部科学省スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクールとしての研究指定など、時代・時代のニーズに応じ、常に新しいものにチャレンジする、佐賀県のパイオニア的な教育実践校としてその存在感を示してきました。

建学の精神は「朝に希望 タベに感謝」。

「希望」と「感謝」はともに心のベクトルです。心の外に向かう意識が「希望」。心のうちに向かう意識が「感謝」です。

また、「希望」は、何か事を始めるにあたって、未来に、そして社会に向かう力。「感謝」は、事をひとたび終えるにあたって、自らを振り返り、内省・沈潜する力です。

令和の、この時代においても、「希望」を胸に、新しいものに積極的にチャレンジするとともに、周囲の人々への「感謝」の気持ちを忘れない、そんな校風を皆さんもしっかり受け継いでもらいたいと思います。



そこで今日は2つの話をします。

まず、「希望」に関して、奥村五百子の話をしたいと思います。奥村五百子は建学の功労者の一人ですが、この人を知っている人はどれくらいいるのでしょうか。意外に知られていないかもしれません。これから少し長い物語になりますのでリラックスして聞いてください。



奥村五百子



奥村五百子は、弘化2年（1845年）、唐津城下、中町にある高德寺の住職奥村良寛の長女として生まれ、明治40年（1907年）、胸の病により63歳で亡くなりました。

明治40年（1907年）は頭に残っていますね。
本校の創立年です。

<https://www.miyajima-soy.co.jp/archives/column/kyoka14>

彼女は幼いころから正義感が強く、いじめられている子がいると、男であろうが女であろうが、年上であろうが、相手かまわず立ち向かったそうです。

そんな五百子は18歳の時、父の頼みで長州まで密書を届けることになりました。江戸の末期の話です。人目に紛れるためでしょうか、男装して旅に出たといえます。それを機に高杉晋作や西郷隆盛とも出会い、勤王の志士たちの連絡に走りまわるようになったそうです。明治維新前後の話です。

当時、女性の地位が今のようではなかった時代、言葉を選ばずに言えば、男勝りの活躍をしていたわけです。それは熱い思い（夢や希望）があったからでしょう。晩年おばあちゃんになった時も、時の総理大臣である大隈重信を怒鳴りつけたというエピソードもあります。

明治維新後、奥村五百子は唐津のためにもたくさんの仕事をしています。

松浦橋の架橋、西唐津港の開港、鉄道唐津線の開設などです。どれも重要なインフラですね。松浦橋に至っては、当時九州一の長い橋で、多くの人とその完成を喜んだようです。それまでは瀬渡し船で行くか、遠回りをするしかなかったでしょうから、その便利さは唐津市民の大きな喜びにつながったことは容易に想像できます。

彼女は晩年、戦争という時代の潮に巻き込まれながらも、正義の志を保ち、戦死した兵士たちの家族を元気づける、軍人遺族救護のためには、婦人団体を設立すべきだと考え、愛国婦人会を立ち上げました。

そういう活動の中、五百子は広岡浅子という女性と大隈重信の紹介で知り合ったわけですが、2人は初対面ですぐに意気投合し、「万事相談相手として互いの長所を認め合う仲」だと言われています。お互いリスペクトしていたわけですね。この広岡浅子という人も素晴らしい業績の人ですので、機会があれば調べてみてください。

そして1906年（明治39年）、胸を病んだ五百子が唐津で病氣療養中だった時に、その広岡浅子が大阪からお見舞いに来ました。その際、せっかく唐津まで来られたならと唐津の有力者を集めて講演会をしようということで、講演会が開催されました。

そこで浅子はこれからの時代には女子教育が必要だと強く主張し、それが翌年の唐津女学校（現在の唐津西高等学校）の設立につながったというわけです。

少し長くなりましたが、奥村五百子のおかげで、広岡浅子が招かれ、本校の創設につながった。そしてその二人はともに時代をたくましく生き抜き、希望に燃えた人物だったということが分かったでしょうか。

第二次世界大戦後、それまでの日本が軍国主義であったことに対する批判的な論調が沸き上がった中、こうした五百子の業績を批判する人もいるのは事実です。

しかし、彼女の根底に流れているのは、弱者へのいたわりであり、平和への強い願いであることは疑いありません。今後、皆さんの中から、彼女の功績を改めて顕彰してくれる人がでてくれれば、五百子さんも喜んでくださるのではないのでしょうか。

五百子の銅像は唐津城のたもと、ちょうど早稲田佐賀の校門に面した道路沿いに、松浦橋を望む姿で立っています。皆さんもぜひ、近いうちにそこを訪れ、この人の縁のおかげで今の自分たちはあるのだと希望の人、奥村五百子の人生に思いを馳せてみてください。



<https://www.miyajima-soy.co.jp/archives/column/kyoka14>

次に「感謝」に関して話をします。今度は歴史ではなく現代の話です。



先月の4月9日、すごいものを見させていただきました。もちろんテレビですが、さいたまスーパーアリーナで行われた村田諒太とカザフスタンのゲンナジーゴロフキンのboxingです。

<https://www.nikkansports.com/battle/news/202204090000311.html>

結果的には TKO で、村田諒太が壮絶に散るというものでした。しかし両者の戦いぶりは実に見事というほかなく、私が言うのもなんですが、お互いがお互いをリスペクトしたうえで対戦し、壮絶な打ち合いの中にも、戦う者としての品格を、見る者に感じさせてくれたと思います。

そうした死力を尽くした戦いもさることながら、感動したのは、試合後の両者の態度です。村田はゴロフキンからパンチで腫れあがっていたにもかかわらず、両目をしっかりと開き、ゴロフキンを見つめていた。一方、ゴロフキンは民族衣装をあしらった自分のガウンをリング上で村田に着せてあげた。

敗者は勝者の強さを、勝者は敗者の勇気を、心からたたえあったように見えました。試合の結果にかかわらず、勝ち負けを超えて、2人に等しく感謝の念が沸いたのだと思います。このゴロフキンと村田の振る舞いからは、両者が究極の試合を合作できた時、そこには何のわだかまりも残らないことを見る者に教えてくれたように思います。

感謝は人の心を大きく、美しく、そして強くします。いくら上手でもプロにはなれません。強い人がプロになるのです。そして強い人はいつも周りの人に感謝している。だからますます強くなる。そんなことを考えさせられた試合でした。

ではまとめます。本日は開校記念日。あらためて本校の建学の精神に立ち返り、「希望」と「感謝」に満ちた学校生活を送ってください。皆さんの生き生きとした姿、ワクワクとした笑顔、「ちむどんどん」な生活を心から期待して開校記念の挨拶とします。頑張ってください。